



文庫

そのきささか





夜を

一節此を

時を

来に

半日

時の

る

明

海に

つる

昭和八年

あつたてのうらなひ
あつたてのうらなひ
あつたてのうらなひ

百明
誓

西行法師のうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ
あつたてのうらなひ
あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

誓

あつたてのうらなひ
あつたてのうらなひ
あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

年一決邦友をなす一と云ふは、
桑と号を採く、神を尊ぶ、
何れ依りて、
大のや、
口をりて、
年一此起き、

御中

折、
か、
ら、
枝、
換、
全、
折、
河、
あ、

大儀
多路

舟人

朱常

持く種の間をいふはふふふ
見しにに言はぬはふふふ
かゝるに載てもいふはふふ
余の鼻をいふはふふ
海をいふはふふ
海をいふはふふ
相の木に小るはふふ
泣永子いふはふふ
乃もいふはふふ
確もいふはふふ

麦泉

信州矢代
路因

稲荷山
冬野

かゝるはふふ
折也中もいふはふふ
木をいふはふふ
河もいふはふふ
割れはふふ
お島に果はふふ
よ折はふふ
鳴り交はふふ
時をいふはふふ
積もるはふふ

眉丈

珉川

戸倉
多奴

高もたしく目もくまもかくそ為棋
徳間 枱心

積もるや為るもささか〜
戸倉 柴白

や〜
中村 多保

岩盤此通即〜
能登より下腹あ〜

能登より下腹あ〜

能登より下腹あ〜

うむこき〜

うむこき〜

うむこき〜

うむこき〜

うむこき〜

うむこき〜

うむこき〜

徳間

戸倉

柴白

中村

多保

能一

麦二

上田 聖業

左十

小まきや梅此を枝に友き
もあうり本そののふり拂り
ふも人も筆さしりり時
さの口や編の荒く人の
此切れえとわきさしり神
切道しあめきしりや時
ささりやふ髪に木の林か
伊某の口ささりりりりり
能くささりりりりりりり
がぬりりりりりりりりり

如毛

三机

甲州神符
芥子

はらぬれりりりりりりり
夢さしりりりりりりり
御を目の果にりりりりり
やさりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
破れ口に海りりりりりり
独れさす履りりりりりり
目の入部りりりりりりり
何りりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり

和吟

芦花

双鯉

白羽

花の只枝に書ハたうりりりり
一まゝとまゝに跡もわらひ
この書ハたうりりりりりり
却さよに神の区辞やま枝
時々枝のこまをこまに中
神もろく垣こにこまを
唯新と木裏の中こまを
時々こまをこまに中

有珠

上総赤金
文机

系阿
俱

枝まわたり一帯一帯
門へおこさるゝむらさき
中まわたりこまのこまを
川まわたり礫れきれき
なくたりやまのこまを
禁じて唯一本れりりりり
りりりりりりりりりり
おとこ路に本へ入るる
貧乏のこまを
川まわたりりりりりりり

上総片目
玄来

加核川
りり

山姥

了中田
りり

昔く此様とちうとちうのち
暮るるね柄もあまや月橋
さたりや内へあゆむとちう
ち付とやうとちう一神橋
時多きまきるる川やとちう
神もや海のちうとちう

夫名
喜江

経田
新江

下総桃子
市石巻

昇永

山さくくくくくくくくく
ゆるるるもはるるるるる
院石尾讀く一收やちうの朗朗

八

庭掃たりりりりりりりりり
なくくくくくくくくくく
ち味とくくくくくくくくく
桃もや笑うくくくくくく
何ちやちうくくくくくく
唯れちちちちちちちちち
紅柳やちちちちちちちち
川柳やちちちちちちちち
了やちちちの甲ちちちちち
七十町目と置ちちちちち

大海舎
魚山

茶室
鳥籠

美英記
百雉

夜露飯
百井

うきやうちをきくにきく
積むかぬとむむし
望りや欲なき極
福事か〜
余念なく北り中
旬富七油新ちぬ
わくくや友さ
おくとおら
新うひ〜

忍箕田

文郷

伊勢

吳鹿

姥倉

九

さむらひの
りを奪ふ
うきやうち
ち〜おれ
抄さく
唯社
真つ
踏てり
むよ
神さ

古舟
厚本

梅心

園田

洞和

几橋

桃あくや直治張る鐘のこ
林舎

くさくさや櫃にきかき橋大工
りよれき松たりの春にうら

あまのりみきく部材む
月田 多社

木も出し抱る家の中にうら
るり雪や杖名にきた村え

折糸や中やハ先へ向てぬ
去塘

夏にやうるふめかてうらこ
ききききかしの家中をうら

ききききかしの家中をうら
鳥東

+

梅うらやうらよの枝もれさむさ
梅友

山さくくふにわらうは信新り
恩言 戸葉

走を囀牛とろくくや桃の花
るる通

桃あくややハ日南に九十九髪
胡笠

多木の替戸法はゆやわらうら

海を理て探さ川やれよのき
上徳村に 蒼枝

山さくくふにわらうは信新り
蒼枝

くさくさや櫃にきかき橋大工
お州原木 梅明

あまのりみきく部材む
梅明

木も出し抱る家の中にうら
梅明

あしうーあさうー川やまの暮
已て来し、耳は徳なり神梅

喜白

本食は梅くーまの力ー

乃とあさうーあさうーあさうー
遅あさう梅くー本のらさ

新飯

のらさあさう梅くーあさうーあさうー

神さうあさう梅くーあさうーあさうー

荒行の眼目とあさうーあさうー

洪北

あさうーあさう梅くーあさうー

あさうーあさう梅くーあさうー

十一

亦あもあさひ上右やをうー

白桂

あさうーあさう梅くーあさうー

濃さあにあさう梅くーあさうー

あさうーあさう梅くーあさうー

吟詠

出とあさう梅くーあさうー

あさうーあさう梅くーあさうー

あさうーあさう梅くーあさうー

玉珂

あさうーあさう梅くーあさうー

あさうーあさう梅くーあさうー

あさうーあさう梅くーあさうー

紅任

下総侯室

一 命を人としてくつとせしむる
くつとせしむるは、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに

巳被

お舟新土
杉波

武井三子
孫

十四

くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに
くつとせしむるに、くつとせしむるに

字曉

桃牛

お紅女

内き女

二十

下向にハ赤狐言て内々うま
少乃時分下左なるぬも杜節
之此のや葉ハ左みハつあさうま
まゆうりつりさきぬをむいさ
此小空を者にきさむいささ
おとさきぬ波ハ木を伐きさうま
之のやてあつ忽此りりまの習
山吹中流ハ位旗ハ井戸流ら
修此推きほろりに叩くぬ遊ぶ
神徳木に集まき貢やうまの習

春之

花平

多様

釈
戶外

十二

山吹やまゆり楠と波ハうま
亭の遊きあまうりうりぬ此後
うりまゆり種強々置き奉の意
赤白な流れを遇てうりゆら産
ま此里ハ赤ゆり昔途中時き
子交子ゆりに確きうりまの習
ちうむきと家にはもてぬ種
あつ時ハ赤ゆり一まん子種き
種まゆり味田子種きうり新朗
とちうむきと口と遊きうり花平

一路

白北

徐登

枝芳

是乃く卯申夕己ぬおし朝しを
知れをせりし身てりまの
明てうし縁たりしうし川橋
書くあし人を告げし朝しを
うしをを控りてし中橋は休
年にな度下敷禁や神橋
此山は末卯うしこそかじこ
守りたる明きしうし中村信
山あきゆよりしたあは時
作向く春うしなりし時

稲改
三怒

編吉

防白

うし中村信よりしたあは時
橋あきゆよりしたあは時
おしをせりし身てりまの
新植をとりてし中村信
斤枝ゆえとるし中村信
一書りし明きしうし中村信
積まや神へあしをさうし
おし目を休るせにうし
おしをせりし身てりまの
うしをせりし身てりまの

市井

祭白

文魚改
三怒

花電ハ潮リハききてる山さくら
花鏡の古くまも七むきき
十家子中一目なりさの言
桃肉くや皮よくに土不こ
ぶよくや持もとりや一鳴あ能
更にくり目もてやとさの言
が強くと蟻這わも横うら
亭アウも都の外や時を
鶯子交も家もやうさの言
柳子乳螺貝法一山梅

志野

平和

路尹

三三

車馬一ハ花鏡を結うて亭あ能
積まや折よてむふ岐を石
石くハふまのあて花出う
あまこおちう一やうり時を
う山まや乞孝ひハ一法う
あ度をも半をさるや神梅
や乃吹や身うううまあれ言
以徳子ハ先にも花出う
う強くと麻れあうり梅
やしらに折るやうむ二

江戸
抵白

あ平古涼
花六

上総赤金
肝江
白林

神もやうはさうしてこれ送るよ

葉は花やさうの家は命を

送るよこれ新を餅うて乾くよ

よ川を流す一歩歩く思問ふ

あかくて花は不昔やう一野山

うさうハ口私うらさうて

此のうらさうを世にたうて不

思ふよ此をさういふやう

何さうや魚もにたうて喰ひ

梅もやうやうにさうさう

林

主梅

江戸

多原

お中ね

多原

多原

六

神もやうはさうしてこれ送るよ

葉は花やさうの家は命を

送るよこれ新を餅うて乾くよ

よ川を流す一歩歩く思問ふ

あかくて花は不昔やう一野山

うさうハ口私うらさうて

此のうらさうを世にたうて不

思ふよ此をさういふやう

何さうや魚もにたうて喰ひ

梅もやうやうにさうさう

ムシコ
松子

イセ
素木

飯田
素江

大田
東楚

下銀寺

做

上野

素輪

三井
市明

此の石は... 江戸 連城

うかき... 佐州 左文

... 江戸 一吉

... 桃魚

... 江左

... 澧水 十九

きりて... 上州 白什

... 笠松

... 和榮

... 斧心

折う糸や城へ汲込むあらしの
生稗石拵しつとや戸櫓
夏結りて母の鏡やむ糸の花
さしきりや田代みまはれ葎侍ひ
まはりや城のまをゆる遊のま
櫓うまにやまをさしつとや
わささしつとや問ふとさしつとや
ふみれをゆるしつとや
谷川とまをゆるしつとや
利しつとや

徐子

眉入

主

まはりや城のまをゆる遊のま
さしきりや田代みまはれ葎侍ひ
まはりや城のまをゆる遊のま
わささしつとや問ふとさしつとや
ふみれをゆるしつとや
谷川とまをゆるしつとや
利しつとや
まはりや城のまをゆる遊のま
さしきりや田代みまはれ葎侍ひ
まはりや城のまをゆる遊のま
わささしつとや問ふとさしつとや
ふみれをゆるしつとや
谷川とまをゆるしつとや
利しつとや

江戸 玉島
上野 味毛
江戸 亦崎
江戸 比川
江戸 如立
上野 浦川
江戸 二巻

出て心とて痛くもぬれよと時々 武井三子 江戸
 桐抄井と汲るに一く水精の角 麦二
 ぬみくして心にしるす山々うら 山光
 蓋て何れ枯れ咲く花のうら 素光
 向ちうらむをさかす梅の 下総漢堂 紫花
 井戸端へ鳥さりしうら の
 折ゆくや葉を美たしうら 此
 大なるぬれぬ心 乃

下ニツツル能うぬるぬ 深急
 走りしうら 梅

桑下見聞

何れも心 汗 入楚
 麻吹中系一里とおも 高 紫
 山崎うら一里にお 佐 諸九
 山崎うら一里にお 中 只言
 山崎うら一里にお カ 吟山
 山崎うら一里にお カ 佛心

秋一葉を風と吹くまじりて
秋の川の中流を流るる水は
見ゆ

土記中

春のよき時を
春のよき時を
大正

大正

秋のよき時を
秋のよき時を
大正

大正

秋のよき時を
秋のよき時を
大正

秋のよき時を
秋のよき時を
大正

秋のよき時を
秋のよき時を
大正

秋のよき時を
秋のよき時を
大正

此社ハ弟ト泣きに在りて
口ト口トきけりとの傳き
昇て曾と云ふも縁ナリ
きや初と云ふ事アリ
初と云ふ時とつち入るの神
好縁と背中向きぬ
伝ふも桂男と云ふ事
ほかにハ世の心と云ふ事
まがやちんすの心と云ふ事
つとむと云ふ事

糾へる藤と云ふ事
口やと云ふ事
二
義入の交度と云ふ事
又藤と云ふ事
伝くと云ふ事
能と云ふ事
我と云ふ事
口と云ふ事
凱と云ふ事
事と云ふ事

之はくまの能化也道々
 兼く不始たる乃々
 兼く子と神と
 兼く口飲一海のま
 うはくまはる神の
 兼く人とおと佐
 兼引て給也手習の
 兼く二兼也まの
 兼にき花の
 兼れ兼中兼の兼中

為吟歌心

兼くまの能化也道々
 兼く不始たる乃々
 兼く子と神と
 兼く口飲一海のま
 うはくまはる神の
 兼く人とおと佐
 兼引て給也手習の
 兼く二兼也まの
 兼にき花の
 兼れ兼中兼の兼中

芝
 兼
 一
 二
 一
 二

世話母此よりわき世話を彼存まき
判るやあやしくぞもよめ一入り夫
常うちにあつとねれを跡てや後
茄子をあつとけいんに押さぬ
誰の縁ハ不二を屏風をまき
こら輝ちきほ正のあつとけい
物中やかり引とけい 蘭うら
際子けきともく不ぬうら
おれ此處もまこと干とあつとけい
とつともあつとけい 神木

花と葉をうらほつとねれ己たつとけい
先蓮葉の葉をうらほつとねれ
庭くそ中双六盤あつとけい
江戸むらあつとけい 江戸の葉
ゆかりあつとけい 江戸の葉
實方とあつとけい 江戸の葉
あつとけい のあつとけい 江戸の葉
あつとけい のあつとけい 江戸の葉
あつとけい のあつとけい 江戸の葉
あつとけい のあつとけい 江戸の葉
あつとけい のあつとけい 江戸の葉

終つて格もあつたしつゝしつゝし
 といふとさにはいふつゝし
 保たけりしけ吹て候し終つ
 味増を物さそ味頗くそと
 他處ハ少御もつとせ此おきてま
 股へあつしと筋つをえしつゝ
 大畑て全貸しつゝぬ散りし
 掬子ハしつゝはきつゝはつゝ
 花つゝしつゝは麻此は角
 といふと交りし長此芝原

武州八王子

替へてやむしつゝしつゝし
 ちりおちとちたむしつゝし
 不やくと吹ともはつゝし
 了る後て都一節と時多
 仰向と心次すしつゝし
 崎つゝしつゝしつゝし

書檮
 百斗
 芝光

桑却書榜君此名花春に杖を寄てあるを興一
 去吾子儂走うは時ういうの初友のりこよ
 又りて後ふれもふにすうをうて希ふな及うに
 草とてはめと信ふまおとよ友のあまこせのむの
 何とてはうく先小仏味と中躰くとして僣塞く
 川迄毎に平うかきこはまりあつて流る目れおよ
 めるに思ふく目とほくめくくくくくくくくく
 してき後をもきうてわらわらわらわらわらわら
 くもやう也

此様榜時お様守り新ハ出を
 うはまきくく

さくさく 中暇子くくく 雛子此春
 出もきんくく 榜中春の暮
 接し やうき後よ 整系お此
 ちうて神抄出るるにんて移めれくくく 杖とまき
 結のよ初後子 福一 給友にきくく 良友あつても
 づる

精にみくく 甲能友り

兄やま やのハまきくく せし
 ちの

此様ハ神抄素良平は右門う何文此信室也

さうらうも女れ教へるはの不二 草

をれくもをれきもさうまうこれ句

あーちれ女まこ

蔓ゆきちきりくくまきりぬにまらるる
まらるる方さるるひるま人のまらるる夫れ教へ
ちきりもつまはのひるま謀るるまらるる

あちれ女まこ 鳥

追加

ざうくと時りの皇の極るる 江戸 大来

本れまると人れまるとまらるる

ほのくくとまに極るるまらるる

まらるるまらるるまらるる 大来

まらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるる

まのく園まらるる 信州 楚川

中々に知りて法もつるるをうらみ
りふハ大はもろくも一筆此をうらみ
おし子とてハ目をもと一因とて
中し子とてハ目をもと一因とて

大い

己ハ

四

三

六三十一

昭和七年七月廿二日

無物属

子

